

## 「全共闘」を研究するという意味

東京外国語大学大学院総合国際学研究科国際社会専攻

趙 沼振

私は、韓国で学部のおよそ2年生のときから現在まで「日本学」を一筋に専門として勉強してきた。中学生2年生のときに初めてJ-POPを聞いたことがきっかけとなり、日本の文化に興味を持つようになった。音楽のメロディーから聞こえる日本語の歌詞はよく分からなかったけれど、韓国とはまた違う特有の雰囲気良かったかもしれない。そこから、映画やドラマなども見るようになり、独学で日本語の勉強を始めたのである。そして高校生になってからは、日本語の勉強を趣味で終わらせたくなかったから、高校2年生のときに数多い外国語のなかで日本語の授業を選択した。おそらくあのときから、私は心のなかで決めていたかもしれない。大学に行くなら、専門は必ず「日本学」としたいと。その後、私は実際に、J-POPを聞くという趣味を持っていた中学生から、日本学を勉強するという専攻を選んだ大学生に成長した。

学部生活の間には、東京へ交換留学したおかげで、頭のなかで想像してきた「日本」の姿に実際に出会うことができた。ひたすら面白い日々を過ごしていたあの留學生活のなかで、これから韓国に戻って就職をするより、大学院に進学してもっと「日本学」を研究したいと思った。そこで、私の研究テーマである日本の学生運動史・社会運動史、「全共闘」に出会ってしまったのだ。

初めて全共闘という言葉を知ったのは、韓国で大学院のゼミを受けていたときだった。そもそもゼミのテーマが「1960年代の日本」だったため、私には見慣れない日本の歴史像であった。学部のおよそ2年生のときは、日本の近世・近現代史という科目があり、本格的に日本史を勉強した記憶はあった。だが、1960年代の「歴史」はなかなか扱われてなかったわけである。1950年代の日本までが「戦後日本史」として枠組みがはっきりと決まっていた。日本の1960年代は、「政治の季節」という表現で描かれながら、さまざまな事件の連続という印象が強かった。そのため、固く論述される「歴史」というよりは、熱く報道され続ける「過去」のニュースのようにみえた時期として感じてしまったのである。当時を生きていた学生たちは、大学の問題から社会と国家のことについてまで深く考え悩むようになっていた。そして、彼らの意見を表すために、闘争のかたちで異議を申し立てたのであろう。こういったところが、私には非常に面白かった。1960年代後半に相次いで発生した各大学の全共闘運動に最も興味を惹かれたのである。

そのなかでも日大全共闘が最も面白いという印象を受けた。当時の日大全共闘は、左翼文化の系統を立ててきた東大全共闘とは異なっていた。そもそも集会が禁じられ、一般的な学生生活すらできなかった日大生は、政治的にもナイーブであり、運動の戦略や戦術も分からない状態だったという。にもかかわらず、日大理事会の約20億円の使途不明金問題が引き金となり、大人数の日大生によってセクツ的

対応から離れた日大全共闘ならではの運動スタイルが築かれたわけである。一連の日大闘争は、動きの予測不可能なマス（Mass）的存在が登場することによって、まさに想像がつかない「1968年」の同時代性がみられる「スチューデント・パワー」の瞬間であった。そして、日大闘争は、だんだん大規模なスケールになり、周辺から「日大全共闘のバリケードは世界最強」という評価を受けるようになった。彼らの姿から、今を生きている私にもその生々しい情熱がはっきり伝わったのだ。これは面白い。当時の日大全共闘の情熱に匹敵するものは、現在の日本においてはこれっぽちもないと思うほど、面白いと思った。

60年安保を皮切りに本格的に学生運動が活性化し、全共闘運動により「若者」または「学生」が民主主義を唱える自発的な役割に区切りをつけたといえる。その後、若者から大人に、学生から社会人になった彼らによって闘争体験の記憶を共有する世代層が固くつくられた。そのため、「1968年」という時代に対する記憶が一種のノスタルジーとして回顧され続けてきたともいえる。しかし、今日の若者は当時の記憶に対して常套的なイメージを描いているだけで、共感を覚えることはなかなかできない。そこからジェネレーション・ギャップが生じてしまったと考えられるのではないだろうか。さらに、メディアを通じて「団塊の世代」または「全共闘世代」とレッテルを貼られたことにより、世代間のコミュニケーションが断絶されたかもしれない。

そのため、現在の若者に「1968年」の時代背景と価値観をインプットすることより、同様の「若者」として同時代性を感じさせることが重要だと思う。今の若者は当時のことを振り返ってみて記憶することはできないけれど、想像して理解することはできるはずだ。そして「学ぶ」「若い」「学生」という枠組みから共感を覚え、徐々にパラダイムを転換させていく練習を積んでいく必要があるだろう。